

「身体論の混迷から何を学か、または詩人の呪い」(平野秀秋)

*詩人の追放について

*『国家』は、ギリシャで善悪が分からなくなった時代に書かれている。分からなくなることは、国家が強くなった時に起きる。国家は、戦争とともに強くなる。

*『神の国』について。カルピニズム米国「一国単独行動主義」の原点の観がある。

*真理が善悪の基準となるという思考は、地中海世界に始まりいまだに欧米を支配している、病的な思考様式である。

この真理・善悪両者の決定的な相違を理解するのは、きわめて重要なことでありながら、実はすこしも難解なことではない。

真理と善悪との収斂点は、当然、未開の部族共同体に置く必要がある。この収斂点を念頭に置くことができない研究は、研究の名に値しない。

*真偽と善悪

この特徴的な問題への端的な回答を行ったものが、19世紀のヘーゲルである。さらに、ヘーゲル的な弁証法を完成したものが、マルクスである。20世紀のこの問題への思想は、マルクスを抜きにすることが出来なくなったのは、このためである(顕著な事例ならサルトル)。

*この問題への20世紀西洋哲学による回答には、3タイプ(または2.5タイプ)がある:

1) 価値に普遍性がある場合には、法則化が可能だとする回答(新カント派)。言い換えると、価値がグローバルなものである場合には、法則化ができるとする。

では、価値に普遍性があるとはどんなことか。世界に普遍性があるのか、それともその中の人間に普遍性があるのか。《プロ倫》の意味。

このように問われると新カント派は、結果的にだが、世界に普遍性がある場合には可能と回答していることになる。

2) この普遍性を人間の側に与えようとするものが、現象学である。直感的には、「嬉しい(悲しい)」ときにはだれでも「嬉しい(悲しい)」ような人間を考える。

それは心理学ではないかという問いは、現象学にたいしてはもっとも適切な問いである。実際この2)は心理学にきわめて親近性を持っている。

にもかかわらず、人間心理が普遍的になることを論じなければならない(現象学)。現象学者は、「心理」といわず(言えず)「感覚」「感情」「意味」といい、「普遍性」といわずに「超越性」という傾向がある。

また、現象学はそこに内在する「人間心理の普遍性 = 世界の普遍性」という楽観論を、ハイデッガーによって否定された。「現存在」である人間が世界を理解する可能性が、否定された。(ジンメル『生の哲学』はより早くから否定的だった)。

3) 同じく心理学でありながら、心理現象の流動性(「内的持続」)を世界そのものと見なすという回答が、これに先だって現れた。簡単にいうと、「流動する心理」は「流動する世界」そのものだと考えようということである。ヘーゲルの「精神現象学」を「心理現象論」に置き換えたものと考えればよい(ベルグソン)。この流派は、心理を「意識」という傾向がある。

これなら、ブルーストの小説(無意識)が世紀の記念碑としてまだしも適切である。

ブルーストの「無意識」には、ヒュームの「習慣」、ソシュールの「ラング」、パトナムの「名指しの同一性」などなど、今日われわれが誤って「文化」と呼ぶものの痕跡が正しく表現されている。これが「追放された」側の芸術に属し、「追放した」側の科学でないことも、象徴的である。

*誤って「文化」と呼ばれるものは、100年以前には中産階級に典型的なものであった。シュニッツラーなどもその好個の事例である。心理(感覚、感情、意識など)を云々できる人間には、時間的にも金銭的にも余裕が必要だからである。

*この「文化」の内容に、ときに「スポーツ」が仲間入りすることがある。これは、この種の「文化」に典型的な誤解である。現代のスポーツは、完膚無きほどに人工システムの手本である。レヴィ＝ストロースはかつて、「儀礼は不平等な起点から、平等な帰結を導く過程。スポーツは平等な起点から、不平等な帰結を導く過程」と指摘

し、両者の外見上の類似を見誤らぬよう戒めた。

*同様の擬似的「文化」は、その後も多数存在し続けた。社会学で最初の事例は、デュルケムが示した。ブルデューの「ハビトゥス」も、擬似的「文化」の矮小化された些細な例の一つである。

*こんにち「身体論」といわれているものは、正確には「人間心理論」というべきもので、ハイデッガーによる第二次大戦後の否定を「無かったことにする」議論である。この点では、ドゥルーズなどを担ぎ回った「ポストモダン論」と同じような一時期の流行であろう。または、正直者プラトンによって追放された「詩人の」呪いなのかも知れない。

身体論に「コミュニケーション」の話題が現れるのは、事態を故意に混乱させ、悪化させるだろう（もっともこれも、ポストモダン論の中で飽きるほど経験済み）。

「ポストモダン論」も「身体論」も、すくなくとも日本では「阪神優勝」を商標登録して球団と係争になっている会社がやっていることと共通するのではないか。「知的所有権ごっこ」に、かぎりなく近いものだろうと思われる。

*実態としては、上記の哲学で「人間」と称されるのは暗に中産階級の成員である。

*中産階級は今日消滅し、代わって90%が中流階級であり、十重二十重に人工システムの檻に閉じこめられた先進国の「国民」が出現した。社会学者も身体論者も、この既成事実に乗じて漫然と100年分の繰り返しをしながら、紙を消費して単に自己正当化をしているだけなのかもしれない（これは自戒です）。

参考文献

*平田松吾『エウリピデス悲劇の民衆像 アテナイ市民団の自他認識』2003

*プラトン『国家』第10章、Ramona Naddaff; *Exiling the Poets*; Chicago, 2002

*その他（フォックス『生殖と世代継承』、ユーウエン『PR! 世論操作の社会史』、以上は法政大学出版局。また、今日のこの報告は『身体論の混迷から何を学ぶか』世界思想社として、やがて刊行されるかも知れない）。